論　説

『デモクリトスとエピクロスの自然哲学の差異』における自然―人間了解（上）
――経済学史と自然認識――

工　藤　秀　明

「死は死ぬ者にとって不幸なのではなくて，生き残る者にとって不幸なのだよ」――彼はいつもエピクロスの言葉でこう語っていたものです。(マルクスの死を報せるエンゲルスの1883年3月15日付ゾルゲ宛手紙より)

はじめに
第1章　設定される問題の歴史的背景と焦点
第2章　通説的同一視に対する反証　（以上　本号）
第3章　「自己意識の自然学」の全体的検討　（以下　次号）
小　括

はじめに

1960年代半ばから70年代初頭にかけて，相次いで顕在化した公害・環境問題と資源枯渇化問題，総じてエコロジー問題は，長期にわたって未曾有の経済的な繁栄をもたらした高度成長の暗部を一挙にクローズアップすることになったが，それらは同時に「経済の成長」「生産力の発展」を中心理念として高度成長を理論的に領導し奨励してきた経済学に対す

る批判や反省を強く促す契機ともなった。爾来，一方では，従来の主流的経済学たる近代経済学，マルクス経済学において，その諸理論を適用しさらに新たなトゥールを開発し彫琢することによって，それらの問題に応用経済学的に対処しようとする試みが進められる[1)]とともに，他方では，これらの問題を，従来の経済学の原理，枠組，体系そのものの問い直しを迫るものと捉え，それに代替しうる新たな経済理論を構築しようとする模索が続けられてきた[2)]。しかしそうした努力にもかかわらず，問題自体はこの四半世紀のうちに地球規模に拡大し，ついには地球エコロジーの存続さえ危ぶまれるほどに深刻化している。そのようななかで，近年，学問的な努力と関心はさらに一段深められ，そもそも経済学という学問はこれまで自然と人間の関係をどのように捉えてきたのか（あるいはこなかったのか），経済理論はエコロジーをどのように認識してきたのか（あるいはこなかったのか），それを歴史的かつ論理的に根本から検証し直さなければならないのではないか，そのようなラディカルな反省が広がり始めているのである[3)]。

その際そうした反省において，焦点の一つとなっているのが，経済学史・経済思想史上，古典派経済学に対する最も根源的な批判者であることによって，現代に至る主流的経済学の一方の創始者となったと目され，また新たな代替的な理論形成の模索においても，しばしば批判的または

1）国際的にも数多いが，わが国についていえば，近代経済学系では宇沢（1974，95）等を，マルクス経済学系では宮本（1975，89）等を，それぞれ代表とするような諸研究が蓄積されてきたし，近年には植田他（1991，94）などのように両系統の協同的研究も行なわれるようになっている。

2）初期の代表例としてはBoulding（1968），Georgescu-Roegen（1971），Schumacher（1973），玉野井（1979）などが，また近年の例としてはEkins and Max-Neef（1992），山之内他（1994），室田他（1995）などが挙げられよう。

3）たとえば固有に経済学史的な研究領域においても，そのような問題関心から，すでにImmler（1985，89），Hampicke（1992），Martinez-Alier（1987）など，多大な努力の傾注された優れた研究が発表され始めている。なおこうした経済学史研究の新しい動向について検討したものとして工藤（1991，94a，94b）を参照。

肯定的な論拠ないし想源とされているマルクスである。彼が多くの理論的・思想的潮流の巨大な交錯点，結節点，転換点になっていることを考えれば，それも当然であって，その経済学（マルクスに即してより正確にいえば，経済学批判）が自然―人間関係をどのように捉え了解していたのかの全容が明らかにされることは，ひとり主流的経済学の一方の回生に不可欠の契機であるというにとどまらない，より広範で多様な意味と影響をもつものと想われるのである。そこでわれわれとしても，経済学の歴史における自然認識という問題の検討を，マルクスから始めることとしたい。

ところで，マルクスが哲学者として研究生活を開始し，やがて経済学者へと自己転生を遂げていったことはよく知られている。一つの学派の創始者的位置にある経済学者が，その学的生活を経済学以外の分野からスタートさせたというのは珍しいことではないし，またそうした学的なパーソナルヒストリーが，同時に彼の思考体系の構成に方法的にも内容的にも決定的な作用を及ぼしたことも少なくない。ペティやケネーやスミスなどについてしばしば指摘されるこのことは，果たしてマルクスにはどのように妥当するのであろうか。とくに哲学者マルクスがそれによって学位を取得しその公刊も企図した処女論文が，自然哲学を主題とするものであったとすれば，やがて体系的に完成されるマルクスの経済学が自然―人間関係をどのように捉えたのかの再検討が課題とされているいまの場合，その哲学から経済学への転生の論理的・歴史的なプロセスの検証はそれだけ一層重要となろう。

本稿は上述の課題をわれわれなりに追求してゆくための緒として，そのようなプロセスの原点をなす哲学者マルクスの処女論文『デモクリトスとエピクロスの自然哲学の差異』（以下では『差異』論文と略記する）について，その自然―人間関係の了解に焦点をあてながら考察しようとするものである。「エピクロスの徒」たることを任ずるマルクスは，師の

本領たる「自己意識〔人間〕の自然学」において師をどのように継承し乗りこえているのであろうか[4]。

第1章　設定される問題の歴史的背景と焦点

『差異』論文[5]は1841年3月に脱稿し学位請求論文としてイェーナ大学に提出されたものである。論文の執筆にとりかかったのは1840年の後半

4）マルクスの初期の諸論稿は，一般に，『資本』を初めとする後期マルクスの理論と思想を新たな光の下に解読しようとする際の重要な光源として，多くの研究者によって注目され，長期にわたって膨大な量の検討と考察が加えられてきている。そうしたなかにあって，この『差異』論文は，これまで論及されることが相対的に少なかったといえるかもしれない。しかしそれでも，この論文をマルクスの思想形成の出発点として早くから注目している例として，世界的にはたとえばLöwith(1949)，Lukács(1954)などの哲学者やOiserman(1965)，McLellan(1970)などの研究者を挙げることができるし，わが国においても城塚（1970），廣松（1971），山中（1972），正木（1972），黒沢（1979）などを挙げることができよう。個々の論点は多岐にわたりながらも，これらの諸研究において議論の主要な焦点となっているのは，この時期のマルクスが，プロイセン絶対王制やキリスト教的権威に厳しい批判を展開していた青年ヘーゲル派と，どのような思想的位置関係に立っていたのか——フランス的啓蒙の立場を共有していたのか，むしろヘーゲル的普遍性の立場により近かったのか，あるいはすでに青年ヘーゲル派以上にヘーゲル哲学に批判的な境位に達していたのか，等々——ということであるように思われる。思想的出発点をどのようなものとして捉えるかということは，その後のマルクスの思想的・理論的な発展をどう理解するかということと直結する事柄であるだけに，この『差異』論文のどこにどのように注目するかも各論者の問題関心を反映して様々であり，読解方法もそれぞれに示唆に富んでいる。しかしこの論文は，ヘーゲル的ターミノロジーが頻用されているという用語法の問題もさりながら，それ以上に思想内容そのものとして，マルクスの数多の著作や論稿のなかでもおそらく最も理解の困難なものに属している——その難解さたるや，マルクスへの徹底的内在と内外のマルクス研究への網羅的通暁とを自負する現代マルクス主義哲学の第一人者・廣松渉氏をしてさえ，初期マルクスを研究対象とした大著において，この『差異』論文を通してマルクスが一体何を言いたかったのか，「正直な話，……必ずしもはっきりしない面がある」「そうはっきりとは読み取れない」と言わしめるほどである（廣松・井上1980，248頁）——ためか，管見の限り，論文の総体的な論理展開を読み通したものは少ないようである。本稿では，先行の諸研究に学びつつ，まずなによりも，『差異』論文全体を，本文に上述した視点から，一貫して解読し切ることに第一の目標をおくこととしたい。

5）*Neue MEGA*, I/1, S. 5-92.

と推定されているが，それ以前に，1839年2月から40年前半にかけて『エピクロスの哲学』という標題を付された7冊のノート[6]，アリストテレスの『霊魂論』に関するノート[7]，ヒュームの『人性論』に関するノート[8]などに見られる大量の抜粋と評注の作成がその準備作業として行なわれている。その各所に示唆的な論述も少なくないが，ここでは論文そのものを主たる検討対象とし，必要な限りで準備ノートも援用することとする。

さてマルクスは，論文の冒頭の「序言」において，自らの研究の全体構想とそこにおける『差異』論文の位置について，「この論文は，私がエピクロス派，ストア派，懐疑派の諸哲学の一団を，全ギリシア的思弁との連関で詳細に叙述するつもりでいるもっと大きな著作の，たんなる先触れをなすもの」(S.13)[9]だと述べている。

原子論的自然哲学の完成者とそのエピゴーネンとに関する小さな問題を扱っているにすぎないのではないか……標題が与えかねない印象を予め打ち消すかのように，マルクスは初発にこう記すのであるが，実際，準備ノートなどの中でも，ギリシア哲学史の全体を自己の問題視角から展望し整理しようとする試みが幾度か行なわれており，「もっと大きな著作」の構想が存在していたことは確かであると思われる。だとすれば，それが主題的に取り扱うであろう対象の全体的な広袤を大づかみにでもおさえておくことが，「先触れ」としてのこの論文を理解する上でも不可欠であろう。そこで，「もっと大きな著作」の構想において見通されていた問題対象の全体的な広がりはどのようなものであったのか，つまりマ

6）*Neue MEGA*, IV/1, S. 5-141, S. 147-9, S. 151 f.

7）*a. a. O.*, S. 155-82.

8）*a. a. O.*, S. 213-32.

9）*Neue MEGA*, I/1のS. 13の意。以下，『差異』論文については，このように本文中に括弧で原頁数のみを記す。訳文はマルクス，岩崎訳（1975）を参照させて頂いた。なお傍点は，とくに注記しない限り，引用者のものである。

ルクスの問題視界におさめられていたギリシア哲学史はいかなるものであったのか，まずはこれを概観しておくことにしたい[10]（表１参照）。デモクリトスとエピクロスの歴史的位置関係や，マルクスの問題設定がいかにユニークで，通説的な哲学史了解に真正面から異議を申し立てるものになっているかも、そこからおのずと明らかになるであろう。

(1) 問題背景としてのギリシア哲学史概観

B.C.20C以降、諸王に率いられ相次いでギリシア半島に南下してきた印欧諸語族が，当初からの村落的分散定住を捨て，貴族たちの主導の下に経済的・軍事的な要衝地に集住してポリス（都市国家）を形成し始めたのは，９Ｃ以降といわれるが，８～７Ｃになると彼らは海を超えて，黒海，地中海の沿岸各地に植民都市を建設し盛んに商業活動を展開し始める。これは，平民への武器の普及，先進諸地域からの貨幣や音標文字の流入などを伴って，ポリス内の伝統的な氏族制度や貴族制度の急速な解体（貴族制度のひきしめを狙った「ドラコンの血の立法」，貴族と平民の調停をめざし財産に応じて参政権と軍務を配したソロンの改革，平民の不満を利用して政権を奪取したペイシストラトスの僭主政などをへ，クレイステネスの改革に至ってついに氏族制度は廃止され民主化の基礎が築かれる）と，慣習，法，掟（ノモス）の大きな動揺とをもたらし，富裕化した平民による新たな生産技術と大規模な奴隷制生産様式との創出を促してゆく。さらに東方専制国家ペルシアに対する戦勝は，重装歩兵などとしてそれに貢献した平民の政治的発言権を一層増大し，ことにアテネはペリクレス時代に至って民主政の完成期を迎える。こうした背景の中でギリシアに新しい文化や哲学・思想が勃興し，やがて一大隆盛

---

10) 以下の論述については，『差異』論文や上記の「ノート」等におけるマルクス自身の論述に加えて，Châtelet (1973)，中村他 (1977)，鳥谷部 (1992)，木田 (1995) 等を参照した。

期が訪れることになるが，その哲学史は次の六段階に分けることができる。

①最初期の三派

ギリシアの哲学的活動は，しばしばヨーロッパ哲学の創始者ともいわれるイオニア・ミレトスのタレス（→ミレトス派）をはじめとする「七賢人」，数学を重視し教団を組織したピュタゴラス（→ピュタゴラス派），唯一不動の「有」を真実在とみ生成を否定するパルメニデス（→エレア派）などを，最初期の先人として開始された。

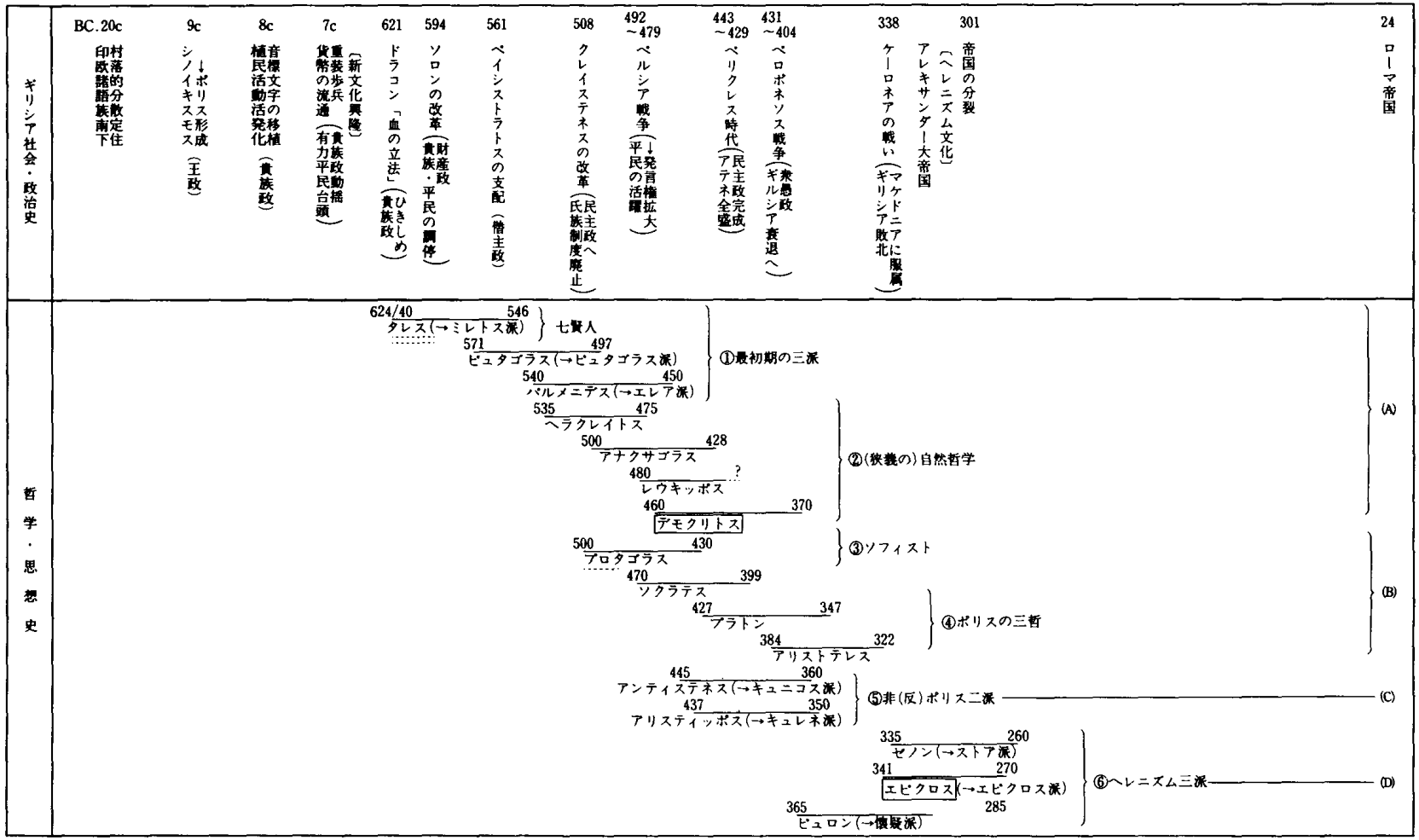
②（狭義の）自然哲学

そしてそのような活動は，自然と世界の誕生と存立と運動を，従来のように神話的な宇宙観や世界創成論によって説明するのではなく，自然的に実在する物質的なものの本性（フュシス）から客観的・総体的に理解し説明しようとする自然哲学として，まず結実する。火を万物の根本物質とみ，その「造化的な火」の働きによる万物の流転を説いたヘラクレイトス，性質の異なる無数の元素（種子）の混合から生成する万物に，ヌースが運動と秩序を与えるとするアナクサゴラス，万象は空虚における原子の機械的な結合と分離によって発生するとするレウキッポスなどをはじめ，数多のフュシオロゴイ（自然学者）たちの百家斉放状態が出来するのである。そして，このレウキッポスの原子論を継承発展させて独自の唯物論的な哲学体系を樹立し，以上のような「自然的存在論」にいわば一つの総括を与えたのが，デモクリトスに他ならない。

③ソフィスト

伝統的な人為たるノモスに対する根源的な真実在たるフュシスの探求，前者の打破と後者への還帰，という自然哲学の対決的な緊張は，次のソフィストたちの間ではしだいに失われてゆく。プロタゴラスの「人間が万物の尺度である」との言葉も，ノモスは全て仮象であり，真偽は相対的なものにすぎず，正義，法，慣習なども，人間社会における実際的有

表1　ギリシア哲学史概観



注）マルクスおよび本文において論及されている主要な哲学者に限定した。①～⑥は通説的な分類。（A）～（D）の再分類については後論を参照。

効性，ひいては政治的・経済的な強者の利害によって左右されるものだ，というように解されることになる。また民主的社会で成功するための不可欠の術としてソフィストたちが伝授する討論術も，やがて詭弁術へと変質してゆく。こうした思想的変容のプロセスは，アテネなどの民主政がデマゴーグの活躍する衆愚政へと退落し，ペロポネソス戦争を通じてアテネとギリシア・ポリス全体が荒廃し解体してゆくのと軌を一にしていた。

④ポリスの三哲

このような危機に際会して，衰亡するポリスを救い再建するための新たな哲学的努力を創始するのが，ソクラテスである。彼は，自らは無知なるがゆえに知を愛し求める者（フィロソファー）と称し，市民たちに問答を挑み，アイロニーを駆使して，政治的にも道徳的にも退落した彼らの社会常識を打ち破り，人間の内的な徳性の喚起と涵養に力を尽すが，ために訴えられた裁判でも批判的姿勢をくずさず，ついに刑死するに至る。これに衝撃をうけたプラトンは，師の姿を後世に伝えるために数多の対話篇を書き，またアカデメイアを創設する。そして，自らも祖国アテネを救うべく，本来ポリスはいかにあるべきか，市民の徳はいかにあるべきかを中心テーマとしながら，魂の眼によって洞察される物事の真の姿すなわち理想と，その不完全な模像である現実の世界，という二元的な「制作的存在論」を展開し，固有の「イデア」的思想を構成する。その弟子アリストテレスは，師のイデア論を批判的に継承し，自然的存在論と制作的存在論との調停を企図する。彼は，158ものポリスの国制調査を実施するとともに，全存在を，不動の動者たる「純粋形相」を極点とする可能態から現実態への運動過程に位置づけて説明する超自然学＝形而上学を基軸とした，壮大な学体系を構築し，ポリス哲学の頂点を形づくることになる。これら「ポリスの三哲」によって，ヨーロッパ哲学の堂々たる原型が確立されたのはまちがいない。しかしアテネとギリシ

アは，彼らの努力にもかかわらずついに立ち直ることあたわず，ケーロネアの敗戦によってポリス時代は幕を閉じ，歴史は，アレキサンダーによって開かれる世界国家とヘレニズムの時代に突入する。

⑤非（反）ポリス二派

しかしこうした終焉をまつことなく，逸早くポリスに背を向けた哲学者がいた。ソクラテスの生前にはその第一の後継者と目されていたアンティステネス（→キュニコス派）は，師の刑死とともにポリスと市民的生活を見限って「犬のごとき（キュニコス的）生活」に入り，貧しい人々のための学校を開設して，ポリス的な善を全て斥け，ただ「徳」のみをまっとうするために，艱難と窮乏に耐え，克己と禁欲を説きかつ実践した。ソクラテスのいま一人の高弟アリスティッポス（→キュレネ派）は，人生の究極目的・至上の幸福を「快」にありとする点で一見対照的であるが，ポリス市民的な規準に一切頓着せず，つねに快楽を選択しうる識見をもって行動すべしと説く点で，同じくすでにポリス的規範を脱していた。つまりこれら二者（→二派）はいずれも，プラトン，アリストテレスのポリス的哲学に先行ないし並行して，ポリス的な生活と思想を否定し，個人に視点をおき，各自の自己自身を規準とした生活実践を重視する非（反）ポリス哲学を展開したのである。

⑥ヘレニズム三派

もしケーロネアの敗戦と，マケドニア王国さらにはアレキサンダー帝国への服属とをもって，ギリシア・ポリス史が現実的に終焉したとみなすならば，ギリシア哲学の本来の歴史も以上まで，と考えることもできよう。そしてその場合，ヘレニズム哲学三派については，とくにアリストテレスまでの「強力な諸前提とはなんらの関係もない，ほとんど不似合な補足」(S.21)とみなされ，ストア派はヘラクレイトスの自然思弁とキュニコス的な倫理的世界観の接合にすぎず，エピクロス派はデモクリトスの自然学とキュレネ派の道徳論の折衷にすぎず，懐疑派はこれらの

独断論に反対して起きた必要悪にすぎず，したがっていずれもギリシア哲学史になんら新しい意義，積極的貢献を加えるものではなかった，とされるかもしれない。なるほど，例えばストア派が，世界の万物は宇宙的な理性が「造化の火」として働くことによって生み出されたものであり，その一つとしての人間も，その宇宙的理性と一体化し，世俗的欲望に囚われぬ自律・自足の生活を送ることによって幸福になるのだとするとき，ヘラクレイトスの世界創成論とキュニコス派の禁欲的倫理観を継承していることは明らかである。またエピクロス派が，万象は原子の集合と離散によって生成消滅するということから，通常，人々の最大の恐怖とされる死も恐れるに足らずと説き，人間の幸福は慎慮によって得られる「心境の平静（アタラクシア）」としての快楽だとし，その追求こそ人生の至上目的だとするとき，デモクリトスの原子論とキュレネ派の快楽主義的思想が受けつがれていることもたしかである。ここから，これらはそれぞれ本史からひき出された二系統の思想を折衷的に混成したもので，力強い本史とは不似合な無くもがなの補足にすぎない，とみなすような評価がでてくるのであろう。

ところが，こうした通説的な位置づけとは全く異なった見方，ある意味で正反対の意義づけをするのが，ほかならぬマルクスである。

(2)　マルクスの問題設定とその焦点

先にふれたように，マルクスは，この『差異』論文がその「たんなる先触れ」にすぎないところの「もっと大きな著作」において，上述のヘレニズム哲学三派を全ギリシア哲学との連関で「詳細に叙述するつもり」だと述べている。すでにそのこと自体，マルクスがいかにこの三派を重要視しているかを物語っているが，おなじ「序言」中で一層はっきりと，これらの三派の哲学体系は「ギリシア哲学史とギリシア精神一般に対して」「高い意義」を有していると記すのみならず，さらに，この三派哲学

こそは「真のギリシア哲学史を理解するための鍵だ」とまで明言しているのである(S.14)。このようなきわめて高い評価は，それらが次代の発展を動機づけ，将来達成されるであろう成果を先取りし，人類史的に普遍的な境地に到達している，といった後代との積極的な関連にかかわっている。つまりこれら三者は,「ギリシアがローマに向かう際にとる形態」であり，世界史上巨大な一時代を形づくることになる「ローマ的精神の原型」にほかならず，さらには「近代世界自身が，完全な精神的市民権をみとめねばならないほど特性にみちた迫力のある永遠的な存在」（S.22）であるとさえ言われるのである。後代に関連づけたこのような評言からも，マルクスが三派にどういう点で「高い意義」を見い出しているのかが暗示されている。しかし「もっと大きな著作」に向けて当面問題となるのは，後代との関連ではなく，先行するギリシア哲学とのそれであり，まさにそこにおいてその意義と迫力のある永遠性のゆえんを明らかにすることこそ，マルクスの研究構想の主題そのものであると言うべきであろう。

ではマルクスは，先行するギリシア哲学に対してヘレニズム三派をどのように関連づけるのであろうか。そこにおいてどのように問題を設定することによって，その意義と迫力のある永遠性が明らかにされるのであろうか。

前節でごく概略的に見たギリシア哲学史は，さらに簡潔に再整理すれば，次のようにまとめることができよう。つまり①の「最初期の三派」は，例えば，ともに幾何学，天文学など合理的な科学を研究しながら，万物の根源を水と考えたタレス（→ミレトス派）も，それを数と考えたピュタゴラス（→ピュタゴラス派）も，あるいはまた，唯一不変不動の「有」から形而上学的唯物論を展開したパルメニデス（→エレア派）も，いずれも自然（フュシス）的に実在する原理から世界全体の真実を理解しようとした点では，広く自然哲学に入れてよいであろうから，②とあ

わせて，(A)「(広義の) 自然哲学」を展開した人々，と一括することができるだろう。それに対してフュシスよりもノモス的世界に関心を集中し，ポリス内での世俗的な成功を目標とする思想を展開した③ソフィストと，それらをも内的要因とするポリスの退廃と荒廃に危機感を抱き，ポリスの再建を主動機として，「成りゆきまかせ」に退落したフュシス的世界観を否定する，「イデア」「純粋形相」を極点にすえた哲学体系を展開する④の「ポリスの三哲」とは，ともにポリスとその市民に主眼をおいたという意味で、両者あわせて(B)「ポリス哲学（非〔反〕自然哲学)」とまとめることができよう。ソクラテスの刑死後，プラトン，アリストテレスに先行ないし並行して，こうしたポリスへの不信・反発から，人間一人ひとり，個自身にたちかえり，そこから再出発する独自の思想と実践を展開した⑤「非(反)ポリス二派」は，それに対して「非(反)ポリス哲学」を有していたと言えるだろう。以上を一括して示すと次のようになる。

①．最初期の三派
②．(狭義の)自然哲学　} (A)．(広義の)自然哲学

③．ソフィスト
④．ポリスの三哲　} (B)．ポリス哲学（非〔反〕自然哲学)

⑤．非(反)ポリス二派—(C)．非(反)ポリス哲学

⑥．ヘレニズム三派 —(D)．自然哲学・的・非(反)ポリス哲学
(A)　＋　(C)

既述のように⑥〔＝(D)〕のストア派は，(A)の中心に位置し②の出発点を形成するヘラクレイトスの自然学と，(C)〔＝⑤〕の一方のキュニコス派の倫理学とを受けつぎ結合するような哲学を，また同じくエピクロス派は，(A)〔そして②〕を総括する位置にあるデモクリトスの原子論と，(C)〔＝⑤〕のもう一方のキュレネ派の道徳論とを継承し統合するような哲学を，それぞれ展開してゆくのである。ここであらためて

一種奇異の感を伴って気づかされるのは，ギリシアとオリエントの交流から生じた東西融合文化たるヘレニズムの哲学において，通常ギリシア思想の中核とされる(B)が，すなわち都市国家の存亡をめぐるソフィストとの思想闘争や，その中で構築される哲学史上の一大精華，ヨーロッパ哲学の原型ともいうべきプラトン・アリストテレスの壮大な体系を包含する(B)が，全く欠落させられている，ということである。

そして実はマルクスが，全ギリシア哲学史との関連でヘレニズム三派を問い，その意義をきわめて高く評価するのは，まさにこの点に注目してのことに他ならない。

まず第一に，マルクスは次のように問う。「プラトン，アリストテレスの総体性にまで拡大する哲学〔(B)〕ののちに、これらの豊富な精神的諸形象によりかかることなく，もっと以前にまで遡って顧みながら，最も素朴な諸派つまり自然学に関しては自然学者たち〔(A)〕，倫理学に関してはソクラテス派〔ソクラテスの高弟アンティステネスに始まるキュニコス派と同じくアリスティッポスに始まるキュレネ派つまり(C)〕とに向かう〔ヘレニズムの〕新しい諸体系〔(D)〕が登場する」のは，一体なぜか。「アリストテレス〔(B)〕のあとにつづく〔ヘレニズム哲学の〕諸体系が，それらの土台を過去のうちに出来上ったものとして見い出」し，エピクロス派においては「デモクリトス〔(A)〕がキュレネ派〔(C)〕と」，ストア派においては「ヘラクレイトス〔(A)〕がキュニコス派〔(C)〕と結びつけられるのは，どこにその根拠があるのか」(S.22)。

敢えて先取りしていえば，「もっと大きな著作」の「たんなる先触れ」であるこの論文では，この第一の論点をなす問に対する答が明示的に用意されているわけではない。しかし，爛熟したポリスの体制が，社会制度的な枠組みとしても，市民の内面的・精神的実質としても，もはや再建のよりどころとはなりがたいまでに腐敗し退廃しているとき[11]，ポリス的世界の人為的前提をとり払い，いまいちど，世界と万象の存立を根

本から原理的に問う自然哲学〔(A)〕に立ちもどり，そのような基層レベルにおける了解と，人間諸個人の生き方を内面的な根源から問い直す倫理的・道徳的な探求〔(C)〕とを，新たに統合し組み直してゆく試み〔(D)〕の延長線上にこそ，ポリスに代わる新たな人間社会の形成の可能性を展望しうると考えることは，決して不自然ではあるまい。この第一の論点は，このような展望とかかわるように思われる。

そしてこの展望の成否の核心となるのは，そうした根源的な自然哲学的認識の中で人間自身がどのように了解されるかということであって，マルクスがヘレニズム三派を高く評価するのも，まさに，真にオルタナティブな社会形成を可能にする十全な，自然(フュシス)的に根源的な人間(=「自己意識」)了解の諸契機をそこに認めたからではあるまいか。し

---

11) ポリス的世界の内部的退廃の過程が，緑豊かな森林や肥沃な大地の喪失・荒廃を伴なったことについては，当時すでにプラトンが，ソクラテスも登場する『クリティアス』のなかで，事実として指摘していたところである。ギリシア世界と思想・哲学との上述来の歴史が，自然的基盤の変貌の歴史でもあったことを物語る証言として重要なので，少し長くなるが引用しておきたい。「今をむかしに比べると，小さな島々でよく見かけることだが，病人の身体が骨ばかりになっているように，肥沃で柔らかな土壌はことごとく流失し，痩せおとろえた土地だけが残されたのである。／だが当時の国土はまだ災害にあっていなかったから，山々は土におおわれた小高い丘をなし，今日〈石の荒野〉と呼ばれているところには，肥沃な土壌に満ちた平野がひろがっていたし，山々には木々の豊かに茂る森があった。この点については，いまでも確かな証拠が残っている。すなわち，アッティカの山々のなかには，いまでは蜂に餌を提供するにすぎないものもあるが，つい先だってまでは，それらの山々から大建築物の屋根を葺けるほどの樹木が数多く伐り出されていたし，これらの樹木でつくられた垂木がいまでも傷まずに残っているのみならず，ほかに数多くの栽培果樹も空高く茂り，家畜の飼料を無尽蔵に実らせていたのである。そのうえ当時の国土は，毎年，ゼウスからの実りの雨を享受し，現在のように，地肌をむきだしにしている大地から海へたちまち雨水を流しさってしまうようなことはなかった。この国土は豊かな土壌におおわれていて，その中に雨水を受けいれ，水持ちのよい粘土質の地層にたくわえてから，高地で浸透した雨水を窪地へと流し，いたるところに泉や川の豊かな流れを提供していたわけであるが，むかしあった数々の泉のほとりには，いまでもそれらの流れに捧げられた社が残っており，これがこの国土に関するいまの話の正しさを証明している。」(プラトン，田之頭訳1975，230～1頁)。より詳しくはCarter and Dale (1974)の第7章を参照。

たがって第二の論点としてマルクスはいう。ヘレニズム三派の哲学において「自己意識〔＝人間〕の全ての契機が完全に――但し各々の契機は一つの特殊な現象として――表出されている」のであって，「これら諸体系は，総括すれば，自己意識〔＝人間〕を完全に構成するものとなる」(S.22)。ヘレニズム諸体系の自然―人間了解に対するマルクスの評価は，こう言い切るほどまでに高いのである。

さらに第三の論点は，そのような了解を達成した哲学と人々・社会との関係についてである。この哲学はそのような了解に立って人々・社会にどのように関わるのか。従来の国家・社会体制が，現実的にも思想的にも崩壊に瀕し，客観的には根本から新たな形でつくり直さるべき歴史段階に到達しているとき，再度根源に立ち戻って自然哲学的な人間了解から新たな個人の生き方を追求する哲学は，現実社会の中で生きている人々がそうした了解と生き方を共感・共有するよう，彼らに具体的に働きかけてこそ，初めて真に意味のある存在となりうるはずである。およそ哲学は，それを究める者が「知者」として人々と社会に働きかけ，受けいれられてこそ，初めて現実に活きる真の学問になりうるのであろうが，このような，哲学の「精神的担い手」あるいは哲学の本来的な主体的性格という重要問題が，客観的・歴史的には起死回生の飛躍を迫られている段階にあるヘレニズム三派において，必然的ながら，再び鮮明に浮上している，というのである。つまり「ギリシア哲学が七賢人〔知者〕のもとで……始まる際にもっていた性格，そしていわばギリシア哲学の中心点として哲学の創造主たるソクラテスにおいて体化されている性格，すなわち知者という性格が，上述の〔ヘレニズム哲学の〕諸体系において，真の学問の現実の姿として主張され」ているが，まさにこの「ギリシア哲学の性格としての主体〔観〕的形式にとって一層重要であり関心をひく」(S.22f.)ものこそ、ヘレニズム三派に他ならないというわけである。

さてこれら三つの論点のうち，歴史的・哲学史的な背景整理の全体に関わる第一の論点が，そのものとして明示的・直接的に論じられるのは，先にも述べたように「もっと大きな著作」においてであるが，それは結局のところ，根源的な自然―人間了解のあり方という第二の問題に集約されてくるであろう。そしてまた，哲学の精神的担い手，その主体性の復位という第三の論点も，第二の論点に関係づけながら，それに付随する形で明らかにされるべきものであろう。したがって全体構想の中心的な主題，問題の焦点となるのは，第二の論点であることは明らかである。そして「先触れ」としての『差異』論文は，まさにこの主題を，三派のうちマルクスが最も重視するエピクロス派の開祖エピクロスと，その自然学上の師といわれるデモクリトスとの比較に照準をあわせて，追求しようとするものに他ならない。

だとすれば，この時期におけるマルクス――前・経済学（批判）者としてのマルクス――自身の自然―人間関係の了解を探る上でも，この追求においてマルクスがデモクリトスとエピクロスの自然―人間了解を具体的にどのようなものとして理解し評価していたかを明らかにすることが，きわめて重要になる。『差異』論文が，本稿の冒頭に述べたわれわれの課題の追究にとって最適・最良の素材の第一のものであり，この上なく貴重な手掛りを与えてくれるものと考えられる所以である。したがってまた同時に，その検討に際しては，一部文言の外在的な摘出に対する禁欲と，総体的な論理展開への徹底的な内在とが求められる所以でもある。

さて『差異』論文の目次構成は次の通りである（S.19f.）。但し，〔　〕を付した部分は現存しない。

序言

第一部　デモクリトスとエピクロスの自然哲学の一般的な差異

I　論文の対象
II　デモクリトスとエピクロスの自然学の関係にかんする諸判断
III　デモクリトスとエピクロスの自然哲学の同一性にかんする諸困難
IV　デモクリトスとエピクロスの自然哲学の間の一般的・原理的な差異
V　結論

第二部　デモクリトスとエピクロスの自然哲学[12]の個別的な差異
第一章　原子の直線からの偏り
第二章　原子の諸性質
第三章　アトモイ・アルカイ（不可分な諸根本原理）とアトマ・ストイケイア（不可分な諸構成要素）
第四章　時間
第五章　メテオーレ（天界・気象界の事象）
補　遺　エピクロスの神学に対するプルタルコスの論難の批判
I　人間の神に対する関係
1　恐怖と彼岸的存在
2　崇拝と個人
3　摂理と貶下された神
II　個人の不死
1　宗教的封建主義について。庶民の地獄
2　多くの人々の憧憬
3　選良たちの自負

12）『差異』論文の冒頭に掲げられた内容目次ではNaturphilosophieとなっている（S.19）が，本文中の第二部タイトルはPhisikと記されている（S.33）。

自然―人間関係の了解の解明を目標としつつ、以下、基本的にこの構成に即して論理展開の内在的検討に努めることとしたい。

第2章　通説的同一視に対する反証

第一部は上掲の目次からわかるように，既にみた問題設定を行なう「Ⅰ．論文の対象」に続く本文のうち，部の表題と類似のタイトルを有する「Ⅳ」および結論部分である「Ⅴ」という重要な後半部分が現存していない[13]。したがって第一部全体の論旨を明らかにするのには，大きな限界があると言わざるをえない。

しかし残された前半部分においても，通説的な哲学史了解に抗するマルクス独自の姿勢と論点は明瞭に示されている。

マルクスはまず「Ⅱ」において，デモクリトスの自然学とエピクロスのそれとの関係にかんする古代から近代に至る諸家の見解を検討し，それらの多くが，後者は前者の「盗作」ないし「剽窃」であるとするようなエピクロスを貶しめる類のものであることを示した上で，「エピクロスが彼の自然学をデモクリトスから借りてきた，という点で全ての人々は一致している」(S.25)と総括する。借りてきたものであるとすれば，当然，両者の学問内容は基本的に同じものであるはずであって，たしかに「原理――原子と空虚――は明らかに同一である」(S.25)。

ところが，マルクスが強調するところによれば，「彼らはこの学問の真理性，確実性，適用に関する，思想と現実との関係一般に関する，全ての点で正反対の立場をとっている」(S.25) のであって，「Ⅲ」ではそれ

13) マルクスの手元におかれたノートや草稿類については，マルクスによって重要視されくり返し繙読されたと思われるものほど，ある意味で当然のことながら，傷みが激しかったり，他所に移されたためかしばしば紛失していることがある。この第一部の重要と思われる後半部分が紛失していることに関しても，同種の事情によるとの推測が十分成り立ちえよう。

が三点にわたって論証されるのである。

まず第一は，「人間的知識の真理性と確実性に関する……判断」についてである。これについてのデモクリトスの見解は，一方で「真なるものはわれわれには隠されている」といいながら，他方で「現われているものが真である」というような懐疑的で矛盾したものである。そして，原子と感覚的現象との関係についての基本的な考え方は，後者を前者そのものには属さない「主観的な仮象」であるとし，「真実の原理は原子と空虚とであって，その他は全て臆見であり仮象である」とするもので，その原理については，感覚的な眼ではなく理性によってのみ達しうるイデアとさえ呼んでいる。デモクリトスにあっては，原子の概念と感覚的直観とが二つの世界に分離され「敵対的に衝突」しているのである。ところがエピクロスの見解は，それとは全く逆に，確信に満ちた定説的なもので，そこにおいては，感覚的世界は主観的な仮象や臆断ではなく客観的な現象であるとされ，それゆえ真理の規準は感覚的知覚であり，それには客観的な現象が照応している，と考えられている。したがってエピクロスにあっては，概念も感覚的知覚に依存しており，両者は分離し敵対するものではないのである（S.25)。

理論的な判断における以上のような相違は，第二に，学問的なエネルギーと実践における二人の対照性として現われる。デモクリトスにとって，原理は現象にはあらわれず現実性を欠如したままであるが，その彼岸に実在的な内容に充ちた感覚的知覚の世界がある。これは主観的な仮象にすぎないが，唯一の実在的な世界として意義をもっており，哲学に満足できないデモクリトスは，経験的な観察と実証的な知識への渇望に駆られて東奔西走する。ところがエピクロスは，それとは全く反対に，哲学そのもので十分満足であり幸福であって，「真の自由が得られるためには哲学に仕えなければならず……哲学に仕えること自身が自由である」とする。そして魂の健康をえるために知恵の愛求（哲学）への専念

を説き，これの真の完成にはなんら寄与しないという理由から，むしろ実証的な諸学問を軽蔑しさえするのである（S.26f.）。

さらに第三に，これら両者は，「思想の存在に対する関係，両者の相関関係をあらわす反省形式」についても全く対照的で，現実の反省形式としてデモクリトスが「必然性」を適用するのに対して，エピクロスは「偶然」性を適用するのであるが，こうした相違は，「個々の自然現象の説明の仕方」の明白な差異として帰結する。つまりデモクリトスは，現実の自然現象を，様々な条件，原因，根拠など実在的可能性によって厳しく制限され基礎づけられ媒介されてあらわれたもの，そのようにして必然性が解示されたものと捉える。デモクリトスにあっては，「説明される客観」こそが問題であって，いわば己を空しうして対象としての対象に関心を集中し，実在的可能性から出発して一つひとつ厳密に悟性的に規定を積み重ねてゆくような説明の仕方こそよしとされるのである。ところがエピクロスは，それとは全く逆に，現実的なものをただ可能であり思惟されうるもの，「思惟する主観」にとってなんの妨げにもならない無制限な抽象的可能性にすぎない偶然的なものと捉える。エピクロスにあっては，「説明する主観」とその「安堵」こそが問題で，客観の実在的根拠の探求には全く関心がはらわれず，ただ「説明は感覚的知覚と矛盾してはならない」ということを唯一の規則として，ひたすら自己意識の平静（アタラクシア）に役立つような説明の仕方がよしとされるのであって，自然認識そのものは目的とはならないのである（S.27-31）。

マルクスはこのようにして，デモクリトスとエピクロスが，理論的判断においても，学問的な実践エネルギーにおいても，思想の存在に対する関係すなわち現実の反省形式についても，全く正反対であり相対立していることを逐一論証するのである。これだけ厳密な検討を加えられれば，もはや両者が「同一の教説に属すると推測することなどできない」（S.32）はずだ。まさにこの「III」のタイトルにあるごとく，マルクス

は両自然哲学の「同一性」を言うには以上のような「諸困難」があることを証明することによって，通説的な同一視に対し完膚なきまでの反駁を加えたのである。

先にも述べたように，第一部はこれ以降，結論部分も含めて紛失しているが，以上の論証過程からも，マルクスが，エピクロスに対して，経験的な自然認識に全く頓着しようとせず「自然の客観的な実在性を丸ごと廃棄するに至っている」(S.31f.)点で批判的でありながら，しかもなお，それほどまでに徹底して自己意識（人間）の主体性を，一貫的に追求し，外的必然性からの主体的自由を斉合的に貫徹している点で，高く評価しようとしていることがうかがわれよう。問題は，このような自己意識（人間）中心主義的姿勢から，どのような自然—人間了解が具体的に展開されることになるのかであって，第二部ではまさにそれが，原子論から天体論に至る諸次元で詳細に検証されてゆくことになる。